ボランティアガイド

2026

Volunteer Guide

多様な世界に出会い、人生の可能性を広げよう！

立教大学

ボランティアってなんだろう？

ボランティア（volunteer）は、「自由意志」を意味するラテン語の「voluntas」が語源と言われています。解釈はいろいろありますが、立教大学ボランティアセンターでは、ボランティアについて次のように考えています。

新座キャンパス あそびフェス

人と出会う

ボランティア活動の本質は「人」との出会いです。
活動の場やそのプロセスでつながる人たちから
私たちは多くを学び、多くの力を得ます。

全学共通科目「ボランティア論」

知を学ぶ

ボランティア活動は「個」を乗り越える知恵を求め、
共に生きようとする知識を生み出します。

子ども服マーケット in Sunshine City（1day ボランティア）

場に育つ

ボランティア活動の「場」には力があります。
困難から立ち上がろうとする力、生きる場を守ろうとする力、
豊かな人間性を求めて挑戦する力が生まれます。

立教チームでつなぐ被災地支援プロジェクト（令和6年能登半島地震）

仲間をつなぐ

ボランティア活動には人を「つなぐ」力があります。
一人の小さな力が動き出すとき、
そこに連なる人を動かす力を紡ぎます。

ボランティア活動がもつ４つの特性

自発性

自分の意志で動きはじめよう！

ボランティア活動は、強制されるものでも義務でもなく、自ら進んで行う活動です。自らの「やってみたい」から始まるからこそ、大きな力や自由な発想、自分の個性を発揮できます。無理して始めるのではなく、自分のタイミングで、できることから始めてみましょう。

社会性

自分の役割を探そう！

社会や組織の中では、誰にでも自分の役割があります。他者との関わりの中で自分の役割を見つけたとき、そこがあなたの「居場所」になります。焦らずゆっくり探しましょう。

無償性

大切なものとの出会い！

自分の行動に対する見返りを求めないことで、自分の想像を超えた世界や発見に出会うことがあります。社会や他者との関わりを通して金銭的な報酬よりもっと大切なものが見つかるはずです。

互恵性

「生かし、生かされる」関係へ！

はじめは、「誰かを助けたい」という気持ちでも、気が付けば、自分が教えられることの連続だった。そのような、お互いが「生かし、生かされる」関係を実感できる、それが「共に生きる」ことの原点です。

立教大学ボランティアセンター　ミッションステートメント

MISSION

立教大学はキリスト教に基づく建学の精神を具体化したものの一つとして、「共に生きる」ことを重視しています。立教大学ボランティアセンターは「共に生きる」を礎に、学生が他者との関わりや社会的な課題に取り組むことを通して、人間としての成長とよりよき社会の実現を目指す意志の育成を図ります。

立教大学ボランティアセンターはこのミッションの下、皆さんを支援します。

1 学生個々の支援
（相談業務、ボランティア・カフェの開催、個の支援）

一人ひとりの学生に寄り添い、ボランティア活動の理解を促進します。社会のニーズと学生のニーズをきめ細かくコーディネートし、多種多様な情報の中から適切な情報提供とアドバイスを行います。

2 多様なニーズに対応した体験機会の提供（1dayボランティア、週末ワークキャンプ）

急変する社会のニーズやグローバル化する世の中の動きに素早くかつ柔軟に対応し、さまざまな体験の機会を提供します。

3 学生ボランティアサークルの支援
（ボランティアオリエンテーション、登録団体制度）

立教大学でボランティア活動を行う学生サークルをつなげ、それぞれの特徴・伝統を生かしながら発展していけるよう支援します。

4 独自のプログラムや学びの場の提供
（キャンプ・授業）

学生が現場に足を運び、自分の目で確かめ、行動・実践しながら学んでいく、主体的な学びができるボランティアセンター独自のプログラムを実施します。また授業の実施などを通じて、社会の現場を知る機会を提供します。

5 立教大学他部局との協働
（学内の協力連携）

学内のさまざまな学生支援部局や立教サービスラーニング（RSL）センターとの協働・連携を推進し、多角的に学生をサポートします。

6 地域連携

立教大学周辺の地域（池袋・新座）の課題に向き合い、共に連携します。

ボランティアを探してみよう！

皆さんの希望や興味に合わせて、多くのボランティア情報の中から自分に合ったフィールドを探してみましょう。あなたの人生に良い影響を与えてくれる大切な出会いにつながることも少なくありません。

1 何をしようかな？

大まかなイメージを描いてみよう

ボランティア活動にも様々な種類があります。あなたが興味をもつテーマ、関心のある分野は何でしょうか。まずは自分自身に問いかけてみてください。
あなたに適したフィールドを見つける、はじめの一歩になります。

主なボランティア活動の分野

多種多様なフィールドがあります

［保健・医療］

［高齢者］

［しょうがい者］

［社会教育］

［まちづくり］

［農山漁村または中山間地域の振興］

［環境保全］

［文化・芸術］

［子ども］

［地域安全］（防災・減災）（防犯）

［情報（IT）］

［観光］

［消費者保護］

［スポーツ］

［科学技術］

［災害救援・復興支援］

［人権・平和］

［国際交流・国際協力］

［男女共同参画社会］

［その他］

ボランティア活動を探すときのポイントは？

自分なりに活動イメージを思い描いてみましょう

［　いつ？　］
春休み、夏休み、秋休み、冬休み、週末…

［　どこで？　］
大学周辺、自宅の近く、被災地、郊外、海外…

［　活動ペースは？　］
とりあえず1回、週に1回、1カ月に1~2回、行けるときに行く…

［　対象は？　］
子ども、しょうがいのある方、被災した方、教育機会の少ない方、高齢の方、外国籍の方…

［　内容は？　］
学習支援、交流支援、居場所づくり、スポーツ競技のサポート、文化交流、援農…

［　費用は？　］
交通費、参加費、保険料…

2 どうしたらいいんだろう？

ボランティアコーディネーターに相談してみよう！

池袋・新座のボランティアセンターには、専門職のボランティアコーディネーターがいます。「ボランティア活動をしてみたいけど、どんなことが自分にできるのか想像できない」「実際にどのように動けばいいのか分からない」「情報が多すぎてそれぞれの違いが分からない」など、様々な疑問や不安に寄り添いながら、みなさんが自分に合った活動先とつながることができるようにサポートします。ぜひ一度ボランティアセンターにお越しください。

コーディネーターの声

［ボランティアセンターは、“想いをカタチに変える場所”］

ボランティアコーディネーターは専門性を生かしながら、みなさんと一緒にその想いの実現を目指していきます。これから何かを始めたい、こんな活動に参加してみたい、参加した活動のことで悩んでいるなど、多様な相談にお応えしますので、まずはボラセンでお話ししましょう。お待ちしています！

ボランティアコーディネーター（池袋）
齋藤 元気さん

コーディネーターの声

［　あなたの「モヤモヤ」を大切にする場所　］

参加したあとの「楽しかった！」も、活動中の「これでいいのかな？」という悩みも、全部ボランティアの醍醐味です。 ボラセンは、一歩踏み出す場所であると同時に、立ち止まって考える場所でもあります。
目的がはっきりしていなくても大丈夫。まずはあなたの「いまの気持ち」を話しに来てください。

ボランティアコーディネーター（新座）
原 一織さん

3 さあ、やるぞ！

フィールドへ飛び出そう！

ボランティア活動には、プログラムへの参加やサークル加入をはじめ、多くの入口があります。
豊富な情報と幅広いネットワークを生かし、ボランティアセンターでは皆さんが活動する場を数多く提供しています。

ボランティア活動の心得

一人ひとりが、立教大学の代表者としての自覚を持って！

ボランティアの活動現場には、多くの人が関わっています。活動先のスタッフもボランティアも、責任の重さは変わりません。事前の準備、活動中の心構え、常識的なマナーなど、以下の６つの心得に注意して、積極的に活動に取り組んでください。

基本中の基本！

無断欠席・遅刻をしない!!
遅刻・欠席の時は必ず活動先に連絡をしてください。 ボランティア活動には責任が伴います。

一人で悩まず、相談する！
困ったことは、 活動先やボランティアセンターに相談してください。

相手の気持ちを考えて行動する！
思い込みで行動するのではなく、 相手の気持ちを考えて行動してください。

挨拶はすべての基本！
気持ち良い挨拶を心がけ、活動中は周りの状況を見て行動してください。

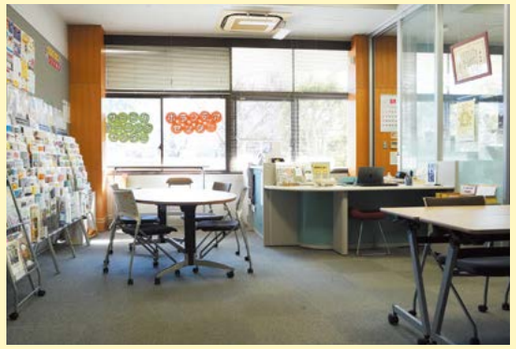
個人情報の扱いに注意！
活動で知り得た個人情報は、 本人の同意なしにSNS上に投稿してはいけません。 また、 個人の連絡先（SNS等のアカウントを含む）を伝えてはいけません。

活動前にはしっかり準備をする！
事前に情報を集め、 正しく理解し準備してください。 事前説明会・研修会には必ず参加してください。

（通称：ボラセン）

ボランティアセンターってどんなところ？

立教大学ボランティアセンターでは、学生のみなさんがボランティア活動を通して学び、成長し、新たな社会を創っていくことができるようにサポートしています。みなさんの意志や想いをカタチにできるようにアドバイスをしたり、実現に向けて一緒に取り組んだり、活動の場を用意したりしていますので、ぜひご活用ください！



池袋キャンパス５号館1階

新座キャンパス７号館2階

このミッションのもと、皆さんを支援しています!

立教大学ボランティアセンター　ミッション・ステートメント

立教大学はキリスト教に基づく建学の精神を具体化したものの一つとして、「共に生きる」ことを重視しています。立教大学ボランティアセンターは「共に生きる」を礎に、学生が他者との関わりや社会的な課題に取り組むことを通して、人間としての成長とよりよき社会の実現を目指す意志の育成を図ります。

ボランティアは、真理への歩みでもある。

立教大学の建学の理念の一つに、「真理の探求」があります。それは、書物や講義の中だけで完結するものではありません。人が人と出会い、世界と向き合い、そこで揺さぶられ、問いを深めていく営みそのものが、真理への歩みと呼ばれるものです。ボランティアとは、まさにそのような歩みを渉り往くことにほかなりません。

ボランティアの現場に立つとき、私たちはしばしば、自分とは異なる背景や価値観、痛みをもつ他者と出会います。そこでは、「同じであること」を前提とした同調は成り立ちません。むしろ、違いを抱えたまま共に在ることが問われます。キリスト教が大切にしてきた「隣人愛」とは、相手を自分に合わせさせることでも、自分を相手に合わせることでもなく、相手を相手として、自己を自己として、尊重し、関係の中に身を置くことです。

ボランティアは、他者との関係の中で自分自身も形づくられていく営みです。その意味で、ボランティアは「他者のため」であると同時に、「共に生きる」ための学びでもあります。違いに身をさらし、揺れ動きながらも共に歩もうとすること。そこにこそ、立教が大切にしてきた真理の探求の具体的な姿があります。立教のボランティアセンターは、皆さんが、その一歩を踏み出す場であり続けたいと願っています。

立教大学ボランティアセンター
センター長
中川 英樹さん
（立教学院副院長／
大学チャプレン）

ボランティア活動をしたい・している学生のための多様なサポート

SUPPORT 1 ボランティアコーディネーターによるボランティア相談

専門職のボランティアコーディネーターが、一人ひとりの学生の想いに寄り添い、ボランティア活動の始め方から活動上の悩み・課題についての相談まで幅広くアドバイスしています。
社会ニーズの変化も捉えながら、ボランティアセンターに寄せられる多種多様なボランティア募集情報を紹介していますので、気軽にご相談ください。

SUPPORT 2 豊富なボランティア関連情報の配架

ボランティアセンター内のラックには、学内外からお寄せいただくボランティア募集情報や助成金・補助金情報、研修・イベント情報などのポスターを配架しています。自由にご覧いただき、関心のあるものがありましたらお持ち帰りください。

池袋キャンパス

新座キャンパス

SUPPORT 3 ミーティングスペースの貸し出し

池袋キャンパスではボランティアセンター内に、新座キャンパスではボランティアセンターと隣接した場所にミーティングスペースがあります。事前に予約すれば使用することができますので、ボランティア活動に取り組む学生サークルのみなさんはぜひご活用ください！

主に新入生向けに配布している冊子

SUPPORT 4 ボランティア活動に取り組む学生サークルの支援

ボランティアセンターに登録している学生サークルに対して、同じようにボランティア活動に取り組むサークル同士がつながり、互いに高め合えるように、情報共有や交流の機会を設けています。2022年度から「立教生ボランティア活動報告会」を開催し、多くの学生サークルが一年間の取り組みの成果や課題を学内外に発信してきました！
その他、ボランティアセンターの登録サークルにボランティア関連情報を共有するためのメーリングリストなども運用し、日常的に活動をサポートしています。団体立ち上げのサポートやボランティアセンターへの新規団体登録も受け付けていますので、ぜひご利用ください！

立教大学ボランティアセンターのあゆみ

ボランティアセンターは、立教大学建学の精神であるキリスト教に基づく教育を具現化するヒューマン・ムーブメントの一つとして、2003年に設立されました。
正式に「ボランティアセンター」として設立される前から「チャペルの諸活動を司るチャプレン室の活動の一環」として、その機能は存在していており、立教大学には長く実り豊かなボランティア活動の歴史と伝統があります。

設立のあゆみ

1926 立教大学におけるボランティア活動の始まりはポール・ラッシュ博士がBSA（聖徒アンデレ同胞会）という祈りと奉仕をモットーとしたグループの立ち上げに遡る

1993 チャペルの諸活動を司るチャプレン室の活動の一環としてボランティアセンターの機能を持つ組織が発足

2001 全カリ総合「ボランタリズムの可能性」開講

2003 **ボランティアセンター発足**
立教大学の押見輝男総長（当時）が「立教大学ヒューマン・ムーブメント」を唱えて、その中の一つとしてボランティアセンターが設立される

2004 八ヶ岳環境ボランティア登山（「清里環境ボランティアキャンプ」）として現在も継続）
災害ボランティア講座開始（現在に至る）

2008 ボランティアオリエンテーション開始
1989年から続く「農業体験in山形県高畠町」がボランティアセンター主催となる（現在に至る）
「バリアフリー映画上映会」開始

2011 東日本大震災復興支援本部事務局担当

2014 ボランティア功労者厚生労働大臣表彰受賞
全カリ総合「ボランティア・『耕す知』と『共生』の探求」開講

2015 一般財団法人日本財団学生ボランティアセンターとの協定書締結

2016 全学共通科目「ボランティア論」開講（現在に至る）

2020・2021 コロナ禍のため対面プログラム休止

2022 学生コーディネーター制度開始

2023 **ボランティアセンター設立20周年**
一貫連携教育・立教学院「清里環境ボランティアキャンプ」再開
「農業体験in山形県高畠町」再開

20周年記念

立教大学ボランティアセンターは、2023年の20周年を記念し、ゲストを招いた公開イベントを開催しました。

2023年5月31日
Fukushimaは世界でどのように報道されているか
※立教大学／大学広報誌 季刊『立教』266号Nov.2023より転載

3・11後の福島県の実情について取材を続けている、本学海外招聘研究員で、オーストリアのジャーナリスト、ユーディット・ブラントナー氏を招き、シンポジウムを開催。世界では「Fukushima」や「原発事故」の問題をどのように捉えているのか。同氏が撮影した「Fukushima」の映像やウィーン在住の日本人アーティスト「Hana USUI」のコラボレーションによるアートプロジェクトなどを上映しながら、福島の現状と復興支援に対する理解を深めました。

2023年6月9日
失敗する力 ～私たちにはどのような失敗が必要なのか～

行動することをためらって動けなくなっている若い世代の背中をそっと後押しするようなシンポジウムを開催。基調講演として、本学客員教授でジャーナリストの池上彰氏が登壇。同氏のさまざまな失敗談や、失敗を成功に結び付ける心の持ち方、思考の転換などについてお話しいただきました。また、学生とボランティアコーディネーターを交えたトークセッションを通して、これからの社会での生き方やボランティア活動が持つ可能性・価値について共有する機会となりました。

2023年12月9日
ボランティアセンター設立20周年記念礼拝

ボランティアセンターの開設20周年を記念して、これまで当センターに関わってくださった方々への感謝とこれからも共に歩んでいくことを祈念し、祈りをささげる記念礼拝を開催。池袋キャンパスの立教学院諸聖徒礼拝堂に集い、ボランティアセンター長の中川チャプレンにより厳かに進められました。建学の精神を具現化したものの一つ「共に生きる」を礎にした日頃の私たちの取組みについてお話しがあり、「立教の中で最も立教らしい部署」であることを改めて実感する機会となりました。

映画「ただいま、つなかん」上映&監督講演、アフタートーク

本学出身の映画監督 風間研一氏（2001年理学部卒業）による、気仙沼でのボランティア活動を支えてきた民宿「唐桑御殿つなかん」の女将と学生との交流を描いたドキュメンタリー映画『ただいま、つなかん』上映会を開催。上映後は、監督の講演、そして本学ボランティア団体に所属していた学生や陸前高田プログラムに参加した学生とのトークセッションを実施し、参加されたみなさまと共に、ボランティアについて考えを深める時間になりました。

年間スケジュール

4月
・ボランティアオリエンテーション

5月
・ポール・ラッシュ博士記念奨学金募集

6月
・学生コーディネーター募集

8月
・学生コーディネーター研修合宿
・一貫連携教育・立教学院 清里環境ボランティアキャンプ

9月
・農業体験 in 山形県高畠町

2月
・災害救援ボランティア講座
・学生コーディネーターふりかえり合宿

3月
・立教生ボランティア活動報告会

❶ボランティアオリエンテーション ❷清里環境ボランティアキャンプ ❸農業体験in山形県高畠町

その他、各種ボランティアプログラム、イベントを随時実施

●海外ボランティアフェア、海外ボランティア参加者報告会

●立教チームで活動する1day ボランティア
・東京都障害者スポーツ大会「水泳競技」「陸上競技」
・東京マラソン　・さいたまマラソン
・大江戸新座祭り　・子ども服マーケット in Sunshine City
・ALL としま× 立教　WAKUWAKU 防災フェス

●週末ワークキャンプ「伝統的な日本酒づくりを支える」

●新座キャンパス あそびフェス

●ボラカフェ・展示企画
・私がボランティアを始めたきっかけ
・ボランティアはじめませんか?
・ボランティアで遊び、ボランティアで楽しむ♪
・ボランティアをさがしてみよう!
～プロから教わる自分にぴったりなボランティアの見つけ方～
・つながりから始まるボランティア
・私のスケジュール大公開!
・ボランティアに興味はあるけど踏み出せないあなたへ!
・展示「みんながボランティアをはじめたきっかけ、おしえて!」

●災害救援ボランティア講座

❹WAKUWAKU 防災フェス ❺大江戸新座祭り ❻ボラカフェ

立教ボラセン主催の各種講座

SESSION 1 海外ボランティアフェア

海外ボランティア活動を運営している団体の方々を両キャンパスにお招きし、長期休み中に参加できるプログラム等についてご紹介いただきました。各団体にご準備いただいた資料は、現地の写真や映像が盛りだくさん。現地での活動内容やプログラムの魅力、語学力、費用等についてより具体的に知ることができました。
個別相談会では、過去の本学参加学生に経験談を伺い、質問に答えていただきました。

海外ボランティア参加者報告会　～立教生が参加した海外ボランティアの話を聞いてみよう～

夏休み期間に海外ボランティア活動に取り組んだ立教生による報告会を開催。日本では経験できないようなことやガイドブックには載っていないエピソード等、学生目線で実際の活動の様子が、写真とともに語られ、文字だけでは伝わらないような海外ボランティアの実情やその魅力を知る機会となりました。

私は去年の夏休みに「good!」のスリランカワークキャンプに参加しました。言葉がほとんど通じない場所で現地の人たちと仲良くなれるのか不安でしたが、実際に行ってみるとそんな不安は次第にどこかへと飛んでいき、とても楽しく貴重な時間を過ごすことができました。言葉がなくても、心を通わせられるということを肌で感じた2週間でした。キャンプに申し込む前は不安が尽きることなく、参加するのを諦めてしまいたくなることもあると思いますが、私はその先へ勇気を出して一歩踏み出せたことに、今は誇りと自信をもっています。
是非、スリランカでの２週間を皆さんにも体験してみて欲しいです。

参加団体：NPO 法人 good!
国：スリランカ　活動分野：道路の建設
法学部 法学科 3年 渡辺 かのんさん

私はボランティア活動でフィリピンに行きました。慣れない環境でのワークは不安でしたが、楽しい思い出でいっぱいの11日間でした。初めての海外で、日本の生活との違いはとても刺激的でした。そして、全国から集まったみんなや現地の人と協力して、ワークしたり、ご飯を食べたり、一日を振り返って感じたことの共有をしたりした時間は、かけがえのないものだったと感じます。
このボランティアの経験は、今の自分に大きな影響を与えてくれた宝物です。日常から離れ貴重な時間を過ごせる機会に、ぜひ参加してみて欲しいです。

参加団体：認定NPO法人 CFF ジャパン
国：フィリピン　活動分野：学校の整備・子ども支援
現代心理学部 心理学科 2年 室岡 夏希さん

就活の前に大きなことをしてみたい! という小さなきっかけで、スリランカへボランティアに行きました。
2週間の中でスリランカの人たちと一緒に生活したり、一から道路を作ってみたりと、色々な経験をしました。毎日が目まぐるしくて鮮やかであっという間でした。きっかけは些細なものでしたが、それに見合わないほど大きなものを得られたと思います。自信が無くて、前に踏み出せなかった嫌な自分を、ボランティアを経て好きになれました。誰かの役に立つことは自分の自信にも繋がります。あの暖かい豊かな場所で自分のことをもっと好きになってください。

参加団体：NPO 法人 good!
国：スリランカ　活動分野：道路の建設
観光学部 観光学科 4年 角谷 更さん

私は今年の夏、「カンボジア国際ボランティア」に参加し、現地で5つの小学校を訪問しました。主にブランコの設置に取り組んだのですが、帰国してから子どもたちが楽しそうに遊んでいる写真が届き、自分たちの活動が形として残っていること、子どもたちの日常の一部になっていることを実感して、とても嬉しかったです。この経験を通して、支援とは特別なことをするのではなく、誰かの日常を少し豊かにすることなのだと気づきました。他にも、音楽の授業への参加、日本文化の紹介、衛生教育などにも取り組みました。言葉が完全に通じなくても、笑顔や一緒に過ごす時間が心をつないでくれることを学びました。

参加団体：認定NPO法人 JHP・学校をつくる会
国：カンボジア　活動分野：学校の遊具建設
文学部 史学科 2年 小島 美侑さん

SESSION 2 ボランティアセンター主催の授業 ボランティア論

ヒューマニズムを基盤に
インクルーシブ社会で求められるボランティア活動を考える
（全学共通科目 コラボレーション科目）

毎回、多様な分野で活躍する講師から、ボランティア最前線の話を聞くことができます。ステレオタイプなボランティアだけでなく、スポーツボランティア、企業のCSR活動など、ボランティア活動が多岐にわたっていることを実感し、ボランティアの「多様性」について理解します。
社会問題を自分の頭で考え、自分と社会との接点を意識する機会となり、毎年、この授業をきっかけにボランティア活動を始めて新しい世界を広げる学生もたくさんいます。

教員の声

皆さんは、「ボランティア」に興味や関心がありますか？そして、ボランティア活動とは何をどうすることなのか？と考えたことがありますか。ボランティアセンターが企画運営する全カリ科目『ボランティア論』では、毎回さまざまな現場でボランティア活動を展開しているゲスト・スピーカーから「私が実践しているボランティア活動」についてお話を伺うことができます。おそらく、「無償で人のため尽くす活動」と言った従来のボランティア観がきっと揺さぶられる学びができると思います。今は何となくでもボランティア活動が気になる学生の皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

コミュニティ福祉学部
特別専任教授／
ボランティアセンター
副センター長
結城 俊哉先生

SESSION 3 災害救援ボランティア講座

2003年のボランティアセンター設立時から、防災・減災や災害時対策の普及・啓発を行っている「災害救援ボランティア推進委員会」と共同で、災害救援ボランティアの基礎的な知識とスキルを習得できる「災害救援ボランティア講座」を開催しています！
災害ボランティアについてだけでなく、日常の場面で想定される応急手当なども学ぶことができ、修了者には、災害救援ボランティア推進委員会より「セーフティリーダー認定証」が、東京消防庁より「上級救命技能認定証」がそれぞれ授与されます。多くの立教生・教職員が講座を修了し、各地で活躍しています。
本学に限らず様々な場所で開催されている講座ですが、立教大学で開催する際には、本学学生・教職員に対して先着25名までは大学から受講料を補助していますので、“無料”で受講することができます。
人気の講座なので、お申し込みはお早めに！

● 主な内容
応急手当活動（上級救命技能講習）、災害ボランティアの基本、出火防止と初期消火、災害想像力を養う3：3：3ワークショップ、災害対策の基本、災害模擬体験と実技、大学・学生・地域による復興支援と防災活動の紹介、災害ボランティア活動の安全衛生と図上演習等。
その他にもボランティアセンターでは、様々な講座の開催、一部検定の受講料補助をしていますので、関心のある方はボランティアセンターでご相談ください！

立教ボラセン独自のプログラム Part 1

有機農業の里として有名な山形県高畠町において上和田有機米生産組合との交流を図りながら、農・食・環境を考える農業体験 in 山形県高畠町など、学生ボランティア活動の可能性を広げる、新たなフィールドの開拓・実践にも取り組んでいます。

PROGRAM 1 農業体験 in 山形県高畠町

多量の農薬散布で農作物を作ることが常識だった40年近く前、いち早くその害に気付き、有機栽培農法で稲作を始めたのが上和田有機米生産組合です。立教大学とは本プログラムで約30年にわたるお付き合いになります。多くの学生を育ててくれた高畠の人々を通して、「土にふれ、食を見直し、共に生きる」ということにまで思いを馳せる5日間です。日常を離れ、高畠の豊かな自然や人としての本質的な生き方を実践している人たちとの出会いは、自身や既存の価値観を見つめ直し、今後の生き方を考えるきっかけとなるでしょう。

稲の間に生えている稗抜き作業中

参加者の声

“人のつながり”と“温かさ”を享受した、忘れられない5日間

農業体験 in 山形県高畠町 参加

農業や食への関心から参加を決めたものの、 最初は「初めての土地でやっていけるか」と不安でいっぱいでした。 しかし、 そんな不安は杞憂に終わりました。 農家さんたちは、 有機農業への想いを熱く語り、 私を家族のように優しく包み込んでくれたからです。 泥にまみれて苗を植え、 雑草を抜く。 その中で、 作物を「赤ちゃん」のように慈しむ農家さんの背中に、 仕事への真摯な誇りを感じて胸が熱くなりました。 作業後の団らんや、 地元ならではの美味しい食事を通して深めた交流は、 何物にも代えがたい時間です。 この5日間で得たのは、 人の温もりという確かな幸せでした。 共に汗を流した仲間とも、 一生続くような関係を築けたと確信しています。 心が震えるほどの発見が、 ここにはあります。 興味があるなら、 ぜひ勇気を持って一歩を踏み出してください。 一生の宝物となる出会いが、 あなたを待っています。

観光学部 観光学科 4年
小林 大和さん

特色ある
立教の
各種キャンプ

学習においては、座学によって理論や知識を習得する「キャンパス・エデュケーション」と実際の現場から学ぶ「フィールド・エデュケーション」、双方の連動が重要です。正課外教育プログラムの中核をなしてきた各種のキャンプやフィールドワークでは、学生が現場へ出向き、他者との関係性を通じてアイデンティティや自立を獲得し、「共生」や「協働」といった考え方や態度を身に付けるようなプログラムを用意しています。農業体験や奥中山ワークキャンプ、林業体験など、立教ならではのプログラムを通じ、あなた自身のキャリア形成につなげていきましょう。

PROGRAM 2 一貫連携教育 立教学院清里環境ボランティアキャンプ

緑豊かな八ヶ岳山麓の清里高原を拠点に、立教学院各校の小・中・高校生、大学生たちが共に取り組む自然保護活動です。一貫連携教育の中で各学校の構成員が集まる唯一のプログラムとして2004年から歴史を刻んでいます。大学生には、単に参加するだけでなく、自然環境保護の専門家（レンジャー）と共にプログラムを創り、実施する楽しみもあります。年代の異なる仲間とも協働していく楽しみ、自然の偉大さにふれながら自分もその自然を保護するという使命感などがあなたの活動を支えます。「他者」と関わることで、「自分」とも向き合える貴重な機会です。

清里の森の中で自然歩道の修復中

参加者の声

チームの結束力を実感

立教学院清里環境ボランティアキャンプ 参加

元々自然保護の活動に関心があり、 幅広い学年の子どもたちと交流したいと考えていたため、 このボランティアに参加させていただきました。 初対面の小中高生とチームを組むという慣れない環境に緊張していましたが、 レクリエーションや食事を通して徐々に仲を深め、 全員で協力して作業を進められました。 私たちのチームの目標はハイキングコースを歩きやすく整備することでした。 全員で試行錯誤を重ねた結果、 無事に柵や橋を設置することができました。 また、 当日は雨天の影響でスケジュールに変更が生じたのですが、 大学生リーダーを中心に臨機応変に対応することができ、 チームの結束力を実感しました。 このプログラムを通して、 小中高生だけでなく教職員やスタッフの方々とも関わることができ、 自身の視野を広げるかけがえのない経験となりました。 新しいことに挑戦してみたい方、 子どもと関わってみたい方など、 少しでも興味がある場合はぜひ応募してみてください。

文学部 教育学科 2年
堀口 紗代さん

立教ボラセン独自のプログラム Part 2

PROGRAM 3 ボランティア初心者大歓迎！ 立教チームで活動する1day ボランティア

立教チームで活動する1dayボランティアは、「ボランティアに関心はあるけど、一人で始めるのは不安」「継続できるか心配」「短期でも、社会課題の解消にガッツリ関わりたい！」という学生に対して、１日から参加できるボランティア活動の機会を提供するプログラムです。 活動には、ボランティアコーディネーター（職員）も同行しますので、活動中に生じた問題や不安についてもその場でサポートいたします。 また、活動ごとに参加者を募集し、毎回新たにチームをつくるため、学年関係なく、どのタイミングからでも参加することができます。2025年度は、全部で8つのプログラム（計12日）の活動を実施。多くの立教生が「はじめの一歩」を踏み出し、ボランティア活動デビューを果たしました。

❶さいたまマラソン

❷東京マラソン

❸ALL としま× 立教 WAKUWAKU 防災フェス

［ 東京都障害者スポーツ大会 ］

「東京都障害者スポーツ大会」は、全国障害者スポーツ大会の派遣選手選考会を兼ねている都内最大規模の障害者スポーツ大会です。立教チームは、「水泳競技（知的･身体）」「陸上競技（知的、身体･精神）」の活動にボランティアとして参加し、大会運営をサポートしました。

水泳競技：5/17（土）

東京アクアティクスセンターで開催された「水泳競技（知的・身体）」では、主に「誘導員」の役割を担当。大会や競技が安全かつ円滑に運営されるように、サポートしました。

ボラセン公式 note はこちら

陸上競技：5/24（土）、25（日）、31（土）

駒沢オリンピック公園総合運動公園 陸上競技場及び補助競技場で開催された「陸上競技（知的）（身体・精神）」では、主に、「開閉会式の旗手」「ハガー」「選手の招集・誘導」などの役割を担当しました。

ボラセン公式 note はこちら

参加者の声

私は競泳の経験があるため、競技の雰囲気や選手の緊張感には親しみがありますが、障害のある方々の競技を間近で見たのは初めてでした。それぞれの障害に応じて細かく区分されているものの、「同じようにスタートして、同じようなルールの下で競い合う」という点は健常者の競技と変わらず、純粋にスポーツとしての面白さと迫力を感じました。今回の経験を通じて、障害者スポーツは「特別なもの」ではなく、誰にとっても等しく真剣な競技であり、その熱量や緊張感は共通していることに気づきました。これからも、こうした場面に関わる機会を大切にしていきたいと感じています。
（観光学部 観光学科 4年）

スポーツは全ての人々に生きがいや達成感など、ポジティブな感情をもたらすという考えをもっていました。活動を通して、その考えは変わらず、さらに強く思うようになりました。選手が「負けたくないです」などと言っているのを聞いたり、走り終わった後に悔しい思いや嬉しい思いをしている選手がたくさんいたということを知り、やはりスポーツはどんな人にとっても人生を豊かにしてくれる材料である事に変わらないと思いました。スポーツは、やらなくても生きていけるけど、そのスポーツの良さをどれだけの人が見出せるか、好きになってくれるかが重要なのだと実感しました。
（スポーツウエルネス学部 スポーツウエルネス学科 1年）

私は今回の活動を通して、「ボランティア」に対するイメージが変わりました。ボランティアとはもっと簡単に参加できないものというイメージが強かったのですが、実際参加してみて、自分が参加してみたいという気持ち次第で参加という一歩を踏み出せるということが分かりました。（文学部 文学科 英米文学専修 1年）

※学年は当時のもの

［ 大江戸新座祭り ］

9月14日（日）に、ふるさと新座館（新座市 野火止）などで開催された『第10回 大江戸新座祭り』において、立教チームの学生ボランティアが30名参加し、その運営をサポートしました。
当日は35度近い気温の中、会場内の各所（ステージ、屋台村など）が多くの市民で大賑わい。夕方から開催された阿波踊りでは、「連」と呼ばれるグループが、交通規制が行われた公道を踊り歩き、沿道に集まった大勢の市民から拍手や声援が送られました。
立教生はボランティアとして、「“射的の屋台”“子どものための抽選会”“本部”の運営」、「会場アナウンス」「阿波踊りの進行サポート」などを担当。地域の方々と協働しながら、一年に一度のお祭りを盛り上げました。

ボラセン公式 note はこちら

参加者の声

ボランティアは報酬が貰えないため、あまり積極的にやろうとは思っていなかったが、実際に活動してみると参加者の方々からの感謝の言葉を聞けたり、子どもたちが楽しんでいる様子を見れたりというように、お金に変えられないものをたくさん得られたので、またやりたい思った。
（観光学部 交流文化学科 1年）

元々、新座市に関わりがなかったため、特に（地域に対する）イメージをもっていませんでしたが、今回の活動に参加して地元を大切にする人が多くいるというイメージを持ちました。阿波踊りが行われなくなってしまった過去があっても、また復活させようと行動する熱い思いをもった人たちが集まり、このような大きな規模のお祭りを開催することができていることを今回の活動を通して知りました。多くの人が参加し、楽しんでいる姿を見て、これを守っていこうとする人々の思いに気がつきました。（法学部 法学科 3年）

4月に志木に引っ越してきて、新座に関する知識もなかったが、お祭りを通して、とても活気のある町だなと思いました。（観光学部 観光学科 1年）

大学に通うときには、新座市は静かで穏やかなところだと感じていたが、活動を通して、地域のお祭りや伝統をとても大事にしていたり、お祭りになるととても活気があったり、新座市の新たな一面が見られたように感じた。
（コミュニティ福祉学部 コミュニティ政策学科 1年）

※学年は当時のもの

［ 子ども服マーケット in Sunshine City ］

6月28日（土）･29日（日）、12月6日（土）･7日（日）に開催された「子ども服マーケット in Sunshine City」の運営に、立教チームのボランティアが参画。子どもを連れた保護者が、子ども服等を選ぶ時間的な余裕を生み出すこと･その楽しさを味わえるようにすることを目指し、子どもを安心して預けられる「遊びコーナー」の企画･運営を行いました！

参加者の声

元々賑やかな街というイメージが強かったのですが、小さな子どもたちが楽しむのには少し難しいのかな、、と思っていました（メイドカフェの売り子がちらほらいたり、ナンパはほぼ毎日見かけるし、歩くたびにぶつかるほど人が多かったり、、）。でも、今回のイベントを通して、やり方次第では、小さな子どもからおじいさんおばあさんまで楽しめる街になるんだなと思いました。子どもと保護者双方がメインのイベントを開催することによって、いつもガヤガヤした池袋が一気に心安らぐ空間に変わったのを見てそう思いました！（法学部 国際ビジネス法学科 1年）

この活動を通して、私は「名前を呼ぶ」ことの力を強く感じました。活動の前半、正直に言うと、私は自分が担当するゲームコーナーの運営や進行ばかりに気を取られ、子どもとの交流という本来の目的を意識できていませんでした。しかし、ふとしたきっかけで子どもの名前を呼ぶようになってから、子どもたちの表情が変わり、距離が近くなったのを実感しました。名前を呼ぶことで、「一緒に楽しんでいる」「あなたをちゃんと見ているよ」という気持ちが伝わるのだと思います。これは、安心感を生む第一歩だと感じました。（異文化コミュニケーション学部 異文化コミュニケーション学科 1年）

※学年は当時のもの

立教ボラセン独自のプログラム Part 3

PROGRAM 4 週末ワークキャンプ「伝統的な日本酒づくりを支える」

「権田酒造株式会社」との出会いから、伝統的な手法での日本酒づくりを支えるボランティアプログラムを2024年度に新設しました。
昨今の酒造りにおいては、機械化による大量生産が進んでおりますが、その手法の在り方自体が社会課題となっている側面もあります。このワークキャンプでは、1泊2日の活動の中で、日本酒造りの現場に触れ、その伝統的な造りを支えることを目的としており、環境との共生、地域密着を通した地産地消・経済循環、そして伝統的な手法の継承などを考えながら、その実践に携わります。
当日は、日本酒の仕込み作業として、酒米の計量や蒸米の運搬、道具の洗浄、酒粕の梱包（商品加工）などを行いました。

日本酒の仕込み作業の様子

活動先 **権田酒造株式会社**（埼玉県熊谷市）

江戸末期の嘉永年間（1850年）に創業。 以来、 埼玉県熊谷の地で約170年酒造業を営んでいます。 立教大学卒業生（加えて、 元立教学院職員）がご家族で経営する酒蔵でもあります。
かつては越後杜氏が担っていた酒造りですが、 平成10年からは地元の社員で行っており、 昔ながらの手造りで、 全てのもろみを槽掛けで搾っています。 代表銘柄の「直実（なおざね）」は、「令和5酒造年度全国新酒鑑評会」で金賞を受賞しました。

参加者の声

観光ではなく、ボランティアとして関わったからこそ
週末ワークキャンプ「伝統的な日本酒づくりを支える」参加

伝統的な日本酒づくりという、 普段触れることのない貴重な現場に身を置ける機会だと思い、参加しました。 また、 今の時代にあえて手作業にこだわる理由にも興味がありました。 実際の作業では想像以上に体力を使い、 人手不足という現実も目の当たりにしました。 しかし、 どの工程も美味しい日本酒を生み出すために欠かせないものであり、 一本を作る上での膨大な手間と、 込められた思いを知ることができました。 また、 作業をする中で権田家の方から「本当に助かります」という言葉を何度もいただき、 自分の作業が現場の力になれているのだと実感できました。 もともと日本酒が特別好きだったわけではなかったのですが、 2日間を通して、 日本酒への愛着と、 作り手である権田家の皆さんへの強い尊敬が生まれました。 観光ではなく、 ボランティアとして関わったからこそ得られた人とのつながりや学びを、 これからも大切にしていきたいです。

社会学部 現代文化学科 4年
安田 愛菜さん

学生サークルとの連携企画

[新座キャンパス あそびフェス]

＼新座キャンパスを“自分”の遊び場にしよう！／

新座キャンパス周辺にお住まいの子どもたちやそのご家族を対象として、「新座キャンパス あそびフェス」を初めて開催！
当日は、芝生の広場や屋外のグラウンドを遊び場として開放。『キャンパスを、“自分”の遊び場にしよう！』を合言葉に、約100人の参加者とボランティア学生が、楽しく体を動かしながら交流しました。
第１部では、日頃から子どもに関わっているボランティアサークルと協働し、各サークルが準備した遊び企画を実施しました。第２部では、参加者が自由に、創造的に、自発的に遊びを展開していけるようなプレーパークの場を運営。立教生は、子どもたちの創造性を引き出しながら一緒に遊んで場を盛りあげました。

第１部：学生サークル３団体による遊び企画の実施

❶ キャンパス DE キャンパス（おちばアート）［企画：立教大学ふくふく］
❷ 空からとばせ！紙コップびこうき［企画：SEMBRAR］
❸ あつまれあそびの森ミニゲーム（わなげ、しっぽ鬼、ひっくり返し競争ゲーム）［企画：子どもクラブ Bambino］

子どもだけでなく、保護者の方々にも遊びに加わっていただきました。真剣に競って悔しがったり、喜んだりしていて、参加されたご家族がみんなで楽しんでいる様子が印象的でした。

第２部：プレーパーク

❹ 自由に遊ぶプレーパーク［会場：１号館前広場・多目的グラウンド］
❺ おち葉のプール［会場：１号館前広場、 企画：子どもクラブ Bambino］
❻ キャンパスのフシギな植物たち（キャンパス自然ツアー）［会場：チャペル周辺、 ガイド：奇二 正彦先生（スポーツウエルネス学部）］

各所には、遊びに使えそうな道具を設置。ボールや「カプラ」などを使って遊ぶ方、鬼ごっこなど道具を使わないで遊ぶ方、様々な遊びの様子を見ることができました。子どもたちからは、「すごく楽しかった、また来たい！」などの感想が共有されました。

活動の詳細は、ボラセン公式noteで記事を公開中！

学生の声

新座キャンパス近くに30年近く住んでいるという方とお話しした際、「昔は息子たちが立教大学内で遊ぶこともあったが、 今はだいぶ遠い存在になってしまった」と残念がっていた。今回の企画は地域の方にとって大学が再び身近な存在になる一つのきっかけになったと思います。
（コミュニティ福祉学部 福祉学科 4年）

今回、 初めて自分たちで一から企画したり、 遊びを考えたりなど、 ここまで深く準備から携わってみて、 今までに感じたことの無い大変さと充実感、達成感を味わうことが出来ました。 すごくいい経験になったので、 これをサークルに持ち帰って、 次の経験に活かしたいです。
（コミュニティ福祉学部 福祉学科 1年）

大学という広い場所で普段できないような大胆なあそびをすることは、 子どもたちにとってワクワクすることだということが分かりました。 普段なら、 絵の具で服を汚したり、 葉っぱまみれになったりすることは怒られちゃうし、 やれないことだけど、 あそびフェスでは何をしても良かったので、 子どもたちのやりたいという気持ちを尊重できたのではないかと思いました。 また、 親御さんも、 子どもたちに誘われてあそびに参加して楽しめていたり、 親御さん同士でお話していたりして良かったです。（現代心理学部 映像身体学科 2年）

※学年は当時のもの

学生の立場から、学生と地域をつなぐ

学生コーディネーターの活動

[学生コーディネーターって何？]

学生の立場からボランティアコーディネーションを実践するプロジェクトです。 ボランティア活動の魅力を伝えたり、 ボランティア活動に参加するためのきっかけをつくったりするなど、 ボラセンのスタッフとともに、 ボランティア活動の機運を高める活動に取り組みます。
2022年から第1期の学生コーディネーターの活動がスタートし、 学生のニーズに対して、 さまざまな“学生コーディネーター企画”を創出してきました。 2026 年度には、 第5期の学生コーディネーターを募集します。 私たちと一緒に、 立教生と地域をつなぐ活動に取り組みませんか?

学生コーディネーターMISSION2025

私たち学生コーディネーターは、 自分たちが感じるボラセンの課題を共有したうえで、 活動の方向性を明確にするために『学生コーディネーターMISSION2025』 をまとめました。

❶ ボランティアの魅力の再発見・発信

「ボランティア」という言葉の硬さ･分かりにくさ･特別感などが学生の中にあり、活動に参加するうえでのハードルが高くなっているため、一部の価値観に偏ることがないように、学生コーディネーター自身が「ボランティア」に対する考えを深めたり、その魅力を再発見したりしながら、それらを多くの学生に伝えていく。

❷ ボランティアセンターの活動の見える化

現状としてボランティアセンターの中身（取り組みや人、情報など）が見えにくい状況にあり、学生がアクセスしにくいということが大きな課題となっているため、ボランティアセンターの活動やそこに関わる人などを広く知ってもらうことで、安心してボランティアセンターに来室できるようにしていく。

❸ 人と人とをつなげるきっかけをつくる

ボランティア活動への一歩を踏み出しやすいような環境づくりに取り組むことで、学生が学内外に限らずコミュニティを広げ、多様な人とつながっていけるようなきっかけをつくっていく。

COORDINATION 1 学生コーディネーター研修合宿＆任命式

活動の詳細は、
ボラセン公式noteで記事を公開中！

昨年度から継続して活動する第1期～第3期の学生に加え、夏の研修合宿から新たに第4期学生コーディネーターが合流。この合宿は、「ボランティアセンターのミッションや取り組みについての理解を深めること」「ボランティア活動やボランティアコーディネーションについての基本的な考え方を理解したうえで、学生コーディネーターとして取り組みたいこと･取り組むべきことを具体的にイメージし、メンバー内で共有すること」「チームとしての連帯感を高めること」を目的に実施しています。当日は、グループワークやロールプレイなどを取り入れながら、楽しく学びを深めていきました。
その後、立教学院聖パウロ礼拝堂（チャペル）にて、「学生コーディネーター任命式」を実施。ボランティアセンター長である中川英樹チャプレンから、メンバー一人ひとりに任命証が手渡されました。

第４期 学生コーディネーター

[人が出会い、考え、動き出す。その瞬間に立ち会えることが魅力。]

今回初めて、ボラカフェ「ボランティアで遊び、ボランティアを楽しむ♪」を企画・運営しました。そのきっかけになったのが夏の研修合宿です。ボランティアの定義を本気で語り合ったうえで、「ボランティアに関する先入観を、どうしたらひっくり返せるだろう？」という問いが生まれ、それを企画につなげてみました。当日は「KAPLA ブロック」を使ったアイスブレイクで、初対面とは思えないほど笑いが広がり、「おにぎりアクション」を通して、楽しさの延長線上にボランティアがあることを体感してもらうことができました。私自身の経験を共有しながら対話する中で、参加者の表情や言葉が少しずつ変わっていくのを感じました。人が出会い、考え、動き出す瞬間に立ち会えること。それこそが、学生コーディネーターの何よりの魅力だと思います。

コミュニティ福祉学部
コミュニティ政策学科２年
古志野 澪さん

第４期 学生コーディネーター

[人と人との和を繋げられるように]

「つながりからはじまるボランティア」というボラカフェを企画・運営しました。 無料の学習支援教室を運営している学外の団体の方と共に、 ボランティアに参加したい人同士を繋げて、 はじめの一歩を踏み出しやすい環境を作りたいと奮闘しました。 3期生の先輩にも同じ企画に携わっていただき、 同期の学生コーディネーターからもアドバイスをもらいながらこの企画を実施することができました。ボラカフェや研修合宿だけでなく、 日常から常に刺激がもらえています。 これからボランティアに挑戦してみようかなと思っている人、自分とは異なるボランティア経験のある人、 ボランティアの受け入れ団体の人。 活動を通して、 本当に様々な人と繋がれるからこそ、ボランティアだから経験できる魅力を伝えたいと強く思いました。 学生コーディネーターとして、 立教生のボランティア分野における人と人との和を繋げられるようにこれからも頑張りたいです!

経済学部
会計ファイナンス学科２年
中原 陽基さん

COORDINATION 2 ボラカフェの企画・実施

活動の詳細は、
ボラセン公式noteで記事を公開中！

「ボラカフェ」は、 カフェのようなゆったりとした雰囲気の中で、 ボランティア活動に関する様々な話が聞けるイベントです。実際にボランティア活動に参加した立教生との交流を通して、「ボランティア活動を身近に感じてもらいたい！」「ボランティア参加へのハードルを下げたい！」 そんな思いから企画・実施しています。
11月19日（水）のお昼休みには、 ボラカフェ「ボランティアをさがしてみよう! ～プロから教わる自分にぴったりなボランティアの見つけ方～」 を池袋キャンパスのボランティアセンターで開催しました。 このイベントは、「活動先の探し方が分からない」 という問題が学生のボランティア活動参加を阻んでいるのではないかと考えて企画したものです。
当日はゲストに東京ボランティア・市民活動センターの職員さんをお招きし、 オンラインシステム 「ボラ市民WEB」 や地域のボランティアセンター（社会福祉協議会 等）の活用方法、 自分の関心の掘り下げ方などを教えていただきました。

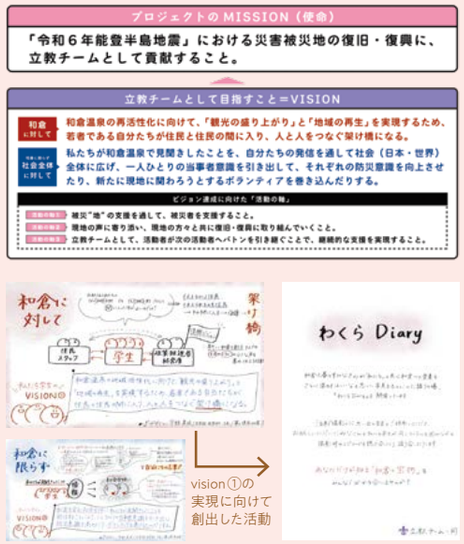
立教チームとして、支援活動のバトンをつないでいく

立教チームでつなぐ被災地支援プロ ジェクト(令和６年能登半島地震)

立教チームでつなぐ 被災地支援プロジェクト
令和６年 能登半島地震

[プロジェクトの概要]

ボランティアセンターでは、 2024年1月1日に発生した「令和６年能登半島地震」 に対する支援活動として、「立教チームでつなぐ被災地支援プロジェクト（令和６年能登半島地震）」を立ち上げました。 卒業生とのつながりから、 活動拠点を石川県七尾市和倉温泉地域に設定。
2024 年度から2025 年度にかけて、 計5回の現地活動を実施。のべ45 名の学生が参加しました。
第2弾では、 参加学生の提案により「立教チームが目指すもの（VISION）」 が策定されました。 現地の方々の声やそれを受け取ったメンバーの想いを「和倉に対して」「和倉に限らず」 の2側面から文章をまとめました。
第3弾以降は、「VISION①（和倉に対して）」の実現に向けた取り組みとして、 立教チーム独自のコミュニティ支援イベント『わくらDiary』を開催。 地域住民の方々にご持参いただいた写真（和倉地域で見つけた宝物）を一緒に見ながら、 その写真にまつわる語りをお聞きし、 その内容を文字に起こして、 記録してきました。



第４弾 2025.8.19（火）～22（金）[3泊4日]

テーマ 「引き出す、受け止める、記録する、広げる」

第４弾では、立教チームの「VISION」の実現に向けて、立教独自のコミュニティ支援イベント『わくらDiary』の第２回を開催。
さらに、本学卒業生が経営する旅館「多田屋」にて、同旅館スタッフと共に公費解体に備えた備品の仕分け・運び出し作業を実施しました。

■主な活動・ボランティア受け入れ先
（１日目）
・旅館「多田屋」（館内の備品仕分け・運び出し作業）
（２日目）
・旅館「多田屋」（館内の備品仕分け・運び出し作業）
・「和倉地域」（写真展 チラシ配布・戸別訪問）
（３日目）
・「わくらす」（『わくらDiary ＃２』の開催）
（４日目）
・旅館「多田屋」（館内の備品仕分け・運び出し作業）

参加者の声

[“人と人とを繋ぐ架け橋”としての役割を果たすために]

第４弾参加

現地に着いてまず初めに行ったのが、 旅館「多田屋」 での備品整理でした。 食事処・客室からホールを何往復もしながら食器やベッド等、 あらゆる備品を運び出したのですが、 備品を「残すもの」 と「廃棄するもの」 に分ける際に、 それらの一つひとつを手に取りながら思い出を振り返っていた女将さんの姿がまだ心に残っています。
3日目に実施した『わくらDiary』は、 私たちの「VISION」と密接に関わっており、目指していた“人と人とを繋ぐ架け橋”としての役割を果たすための重要なイベントでした。 いざ始まると、 前日にチラシをお渡しした方や第2弾で関わった方、 まちづくり協議会の方も来てくださりました。 同じ土地で育っても何を見てきたかは人それぞれです。 一人の思い出をみんなで共有し、 みんなの思い出になった時には、 地縁だけでは表しきれない、 もっと深いつながりが生まれたのではないでしょうか。

社会学部 社会学科４年
大野 晴飛さん

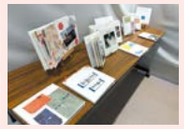
第５弾 2026.2.11（水・祝）～15（日）[4泊5日]

テーマ 「再会を通して手渡し、残す」

最後の現地活動となった第5弾では、 和倉地域で暮らす住民の方々が大切にしている“地域の宝物”を写真や文字を通して可視化し、 世代を超えて共有し合うことを目指して、 これまでの活動の集大成となる「わくらDiary 写真展」 を開催しました。 写真展を通して、 これまでお世話になった方々と再会し、 感謝と活動の区切りをお伝えすることができたほか、前回の活動で知り合った地域の 「和楽会」 の方々との交流イベントを実施し、 学生が準備した「福笑い」をしたり、 歌を歌ったりして楽しい時間を過ごしました。

■主な活動
（1日目）
・「和倉温泉 お祭り会館」（写真展に関する打合せ、会場設営）
・「和倉地域」（写真展 チラシ配布・戸別訪問）※翌日以降も実施
（2日目）
・「和楽会 ※和倉住民による婦人会」（交流イベント実施）
・「わくらす」（展示物準備）
・「和倉温泉 お祭り会館」（会場設営）
（3日目）
・「曹洞宗 青林寺」（挨拶・被害状況のヒアリング）
・「和倉温泉 お祭り会館」（会場設営→写真展の実施）
（4日目）
・旅館「多田屋」（挨拶・被害状況のヒアリング）
・「和倉温泉 お祭り会館」（写真展の開催）
（5日目）
・「和倉温泉 お祭り会館」（写真展の開催）

❶和倉に暮らす方々が「和倉で見つけた宝物」（『わくらDiary』を通して受け取った写真と語りの記録）
❷「立教生が見つけた和倉の宝物」



❸立教チームの足跡
❹和倉小学校の子どもたちの作品
❺持ち寄った写真の印刷コーナー

参加者の声

[また和倉へ帰りたい]

第５弾参加

立教チームの活動の節目として位置づけられた今回は、『わくらDiary』を通して受け取ってきた写真や語りの記録を、 和倉で暮らしている方、 和倉を訪れた方、 様々な方々と共有すること、 そしてこれまでお世話になってきた方々への感謝を伝えることを目的に「写真展」を開催しました。 さらに、 前回の『わくらDiary』開催時に出会った参加者との個人的な縁から「和楽会」との交流会も実施することができ、 半年ぶりの「再会」を果たすことができました。 レクを準備していったのですが、 いつの間にか和楽会恒例のゲームやお喋りなどをみんなで楽しんでいて、 笑いが絶えない時間でした。 写真展には、 のべ約150 名の方にご来場いただき、 みんなでつくることができた喜びを実感しています。 和楽会の皆さんにも足を運んでいただき、 なかには全日程来場してくださった方もいました。 展示を見ながらまた新たな思い出も共有していただきましたが、 他にもまだたくさんお持ちだと思うので、 それをお聞きするためにまた和倉へ帰りたいと思います。

文学部 キリスト教学科４年
鈴木 夏凜さん

地域・社会で活躍する立教生ボランティア

ボランティアセンターが主催している活動以外にも、学生サークルや地域団体など、様々な団体がボランティア活動を企画・運営しています。
活動分野や活動場所、活動に参加したきっかけなども多様です。
ここでは、学外に飛び出してボランティア活動をしている学生を紹介します！

CASE 1 乗り換えで通るだけだった池袋が、少しずつ“自分のまち”に

活動先：「池袋リビングループ」「シャボン玉KIOSK」「Cleanup & Coffee Club（CCC）」

まちづくりに興味があった私は、 コミュニティ政策学科の授業に来ていたゲストスピーカーとの出会いをきっかけに、「池袋リビングループ」 というマーケットの運営にボランティアとして関わるようになりました。 最初は通学の乗り換えで通るだけだった池袋が、 活動を通して少しずつ「自分のまち」 のように感じられ、 今では世代を超えてつながる「まちのおともだち」もできました。 地域の方々と一緒に場をつくる中で、 池袋の新たな魅力に出会えるのがこの活動の面白さであり、 自分に身近な地域で活動する楽しさだと考えています。 現在はさらに活動の幅を広げ、 喫煙者同士の「タバコミュニケーション」 から着想を得た「シャボン玉KIOSK」 を運営し、 まちなかでシャボン玉を吹きながらコミュニケーションの種を蒔いています。「誰かのため」 というような大きな志だけがボランティアのきっかけではありません。 私は自分自身の何気ない興味やちょっとした関心が、 気づけば地域との関わりやボランティアにつながっていました。 だからこそ、 まずは自分が「楽しい」 と感じることを大切にしながら、 無理なく続けていくことが大事だと考えています。

観光学部
観光学科４年
前田 日和里さん

CASE 2 価値観や文化の違いを超えた繋がりこそが、活きる経験に

所属団体：Philippines Relationship Club（PRC）

我々、 PRC にしかない魅力は、 コミュニケーションの中から得られる学びだと思います。
PRC では、 年2回フィリピンの山間部にあるアンツと、 海に面したロンブロンへ行くキャンプを開催しています。
アンツキャンプでは、 学校を訪問し授業をしたり、 村の方々に日本の文化に触れてもらうイベントを企画したりと、 まさに人と人との繋がりが中心となる活動をしています。 価値観や文化の違いを超えた繋がりこそが、 多様性や多文化共生が求められている世の中で、 活きる経験になると確信しています。
またロンブロンキャンプでは、 公的機関と協力して植林活動を行っており、 環境問題に関心のある方は、 この経験が深い問題理解の手助けになるはずです。
PRC の全ての活動が学生主体で行われており、 村に行くまでに何度もミーティングを行います。 自身の成長はもちろん、 共にキャンプに行く仲間たちと年齢を超えて仲良くなる事も魅力です! ぜひ、 PRC であなたが大切にしたい事を見つけてみてください!

文学部
キリスト教学科３年
小島 敬二郎さん

CASE 3 大きなことができなくても、自分にできることから始めればいい。

活動先：Müll（ミュル）

Müll は、2022 年に「ポール・ラッシュ博士記念奨学金」を受給し、新座キャンパスを拠点とした活動を始めました。「個人の少しの意識変化によって、これまでゴミとして捨てていたものや特に気にかけていなかったものが、新たな有意義なモノに生まれ変わる」ということを伝え、循環型社会や環境問題への関心を広げていくことを目指しています。
主な活動は、「①ペットボトルキャップのアップサイクル」と「②服と本の交換会“くるっとマーケット”の企画・運営」です。①では、ペットボトルキャップから「傘のマイタグ」や「栞」をつくることに挑戦しています。さらに、②では、不要になったものをメッセージと共に新たな持ち主のもとへ届ける（交換する）機会を創出しています。2025 年12 月に「クリスマス交換会」として初めて実施したのですが、誰かの不要なものが別の誰かの大切なモノになる、工夫次第でゴミがゴミでなくなる、そんな私たちの思いが実現した機会でもありました。加えて、2026 年２月には、「東洋製罐」さんとコラボし、「エシカルエキスポ」に出展しました。今後は学外での取り組みも広げていきたいです。
「利便性や効率が重視される社会の中で、少し立ち止まり、工夫する時間をつくる。そうすることで、人とのつながりも生まれる。自分自身もあたたかい気持ちになれる。」活動を通して学んだことです。環境問題、気候変動などが問題としてあるのはわかる。でも、「自分には何ができるんだろう？」と、ずっと考えていました。自分のできること、ワクワクすることからでいいのではないかと思います。環境問題を重く捉えるのではなく、ワクワクする体験から自然に行動につなげることを大切にしています。大きなことができなくても、自分にできることから始めればいい。私たちと一緒に始めませんか？

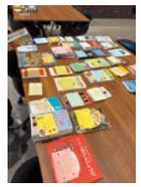
観光学部 交流文化学科４年
石黒 菜穂さん

くるっとマーケット「服と本の交換会～モノがまわる、想いがまわる～」

主催：Müll ／ 共催：立教大学ボランティアセンター

手放すのはもったいないけど・・・。自宅でしまったままになっている「服」や「本」を、次の誰かに回して活用してもらおうとする取り組み『くるっとマーケット』を新座キャンパスで開催しました。
まずは第一段階として、誰かに託したいモノを回収する「くるっと回収会」を実施。持参いただいたモノとの思い出（物語）をモノに添えるタグに書いてもらいました。
第二段階として実施した「くるっと交換会」では、回収期間に集まったモノを持ち帰ってもらったのですが、モノに添えられているタグを読んだうえで、前の持ち主の想いや物語も含めて受け取ってもらいました。

→



詳細はMüll
Instagram

ポール・ラッシュ博士記念奨学金

[ポール・ラッシュ博士記念奨学金とは？]

ポール・ラッシュ博士記念奨学金は、キリスト教の精神にもとづいて、地域、教会、病院などへの奉仕活動を生涯にわたって実践された、元本学名誉教授ポール・ラッシュ博士を記念して設けられました。この奨学金は、キープ協会在米後援会（キープ協会は、地域活動、キリスト教学生活動などの拠点として同博士が設立された機関です）、およびその他の有志によって寄贈された基金とその収益金をもとに支給されています。
ポール・ラッシュ博士の精神や生涯にわたる諸活動を記念し、本学学生に奉仕の精神に基づく諸活動（おもにボランティア活動）を奨励し、援助することを目的としています。
奨学金額は、年額合計70万円以内（給与奨学金）です。詳しい手続は、募集要項を参照してください。

ポール・ラッシュ博士記念奨学金に関する詳細な情報は、
ボランティアセンターのwebサイトに掲載しています。

[主な掲載内容]　直近の募集要項・願書
ポール・ラッシュ博士について
歴代採用計画・受給者について　など

※閲覧には、V-CampusIDの入力が必要です。

[お問い合わせ先]
立教大学ボランティアセンター
池袋キャンパス：5号館1階　Tel. 03-3985-4651
新座キャンパス：7号館2階　Tel. 048-471-6682
E-mail : volunteer@rikkyo.ac.jp

よくある質問

QUESTION 1 これからボランティア活動をしようと思っているという学生も応募できますか?

はい。これから活動される予定の方も対象となります。

QUESTION 2 ボランティア活動の頻度、継続性はどの程度求められますか? また、どのような内容が、対象と見なされますか?

頻度、継続性については特に定めていません。ボランティア活動は強制されたルールに従って行うものではなく、自発的に自分の意志で行う無償（交通費などの実費支給は除く）での活動で、内容は互恵性、社会性のある活動になります。
企業の営利目的としたものは対象外となり、本奨学金は学生個人（学生団体）が中心となって行う活動を対象としています。

QUESTION 3 日本学生支援機構の奨学金との併給は可能でしょうか?

経済支援を目的としているJASSOの奨学金とは使途目的が異なりますので、併給は可能です。

QUESTION 4 活動計画書はどのようにまとめたらよいでしょうか?

書式は自由です。日程・動機・費用など含め2,000字以上で計画書を作成してください。過去の活動報告書はボランティアセンターで閲覧できますので、ぜひ参考にしてみてください。作成の際には、第三者にとって読みやすい構成としてください。大学教育開発支援センター作成のMaster of Writingを参考にしていただくと良いと思います。

QUESTION 5 推薦書は、どのような方にお願いしたらよいでしょうか?

ゼミの担当教員、アカデミックアドバイザー、学科の教員（学科長、学部長）などにお願いするとよいと思います。活動を知らない先生でも、自ら説明することで推薦状を書いていただくことが可能です。既に活動中の方は学外の関係する団体の担当者でも大丈夫です。文字数の制限はありませんので、書いてくださる方のご判断で結構です。

※注意：推薦者の署名（自筆）・押印（スタンプ印不可）が必要です。外国語の場合は、日本語訳も必要となります。

[2025年度実績]

出願期間：2025年10月1日（水）～20日（月）　※出願期間は年度によって変更あり

受 給 者：末村 彩芽さん（観光学部 観光学科1年）
計 画 名：「宿題レスキューin まんまる」
支 給 額：65,255円

受 給 者：徳竹 愛子さん（異文化コミュニケーション学部
異文化コミュニケーション学科 4年）
計 画 名：「フィリピン・マニラにおける「循環型教育支援」実践プロジェクト
― 元受益者と共に学びの循環を創る地域活動 ―」
支 給 額：490,000円

※学年は当時のもの

受給者の声

お世話になっている地域への恩返しとして

私はポール・ラッシュ博士記念奨学金を受給し、地元で学習支援ボランティアを実施しました。
この学習支援イベントを企画したのは、生まれてからお世話になっている地域への恩返しと、地域住民にも地元への愛着をもってほしいという思いからです。
当日は、地元の大学生を巻き込んでスタッフとして協力してもらい、子どもたちに学習指導を行ったり、本奨学金を活用して購入したカードゲームや折り紙を通した交流を行ったりしました。活動後には、子どもたちから「次はいつやるの？」という声や、大学生スタッフから「また参加したい」という言葉をもらい、取り組んでよかったと感じました。地域の方や子どもたちからの言葉はやりがいや自信となり、活動を続ける大きな活力になっています。
この奨学金に応募して、自分のやりたいことが改めて明確になりました。書類作成や面談を通してボランティアへの思いを見つめ直すことができ、今後のモチベーションにもつながりました。ぜひ迷っていたらチャレンジしてみてください。

観光学部
観光学科2年
末村 彩芽さん

受給者の声

奉仕の意味を問い直す貴重な経験に

フィリピン・マニラで、支援を受けて育った若者が次の世代を支える側へと転換する教育活動を実施しました。ストリートチルドレンであった若者たちが自らの経験を語り直し、現在も路上で暮らす子どもたちに学びを伝えるワークショップを企画・運営し、奉仕の精神が地域の中で循環する場の提供を目指しました。
活動を通して、支援は一方的に与えるものではなく、立場を超えて人から人へと受け継がれ、巡り合っていくものだと強く実感しました。若者たちが今までの経験と向き合いながら、何を伝えることが出来るのかを自発的に模索している姿は何よりのやりがいであり、奉仕の意味を問い直す貴重な経験となりました。
奨学金により活動計画を主体的に形にすることができただけでなく、ボランティアセンターや清里のポール・ラッシュ記念館の皆さんともご一緒する機会をいただけました。
この活動を単発のものにせず、今後も奉仕の精神を持ち続けていきたいです。

異文化コミュニケーション研究科
異文化コミュニケーション専攻
博士課程前期課程 2年
（5年一貫プログラム5年）
徳竹 愛子さん

ボランティアセンターとつながろう

「あなたの当たり前って本当ですか？」

全カリ立教サービスラーニング（RSL）科目を履修して、社会という「フィールド」に飛び出そう!!

キリスト教精神に基づく教育を展開する立教大学では、建学の精神のひとつとして、「共に生きる」という理念を大切にしています。人々に寄り添い、共に活動することを通して、本学の学生が様々な価値観や文化を知り、社会を担う一人の市民としての力を養ってもらいたいと考えています。このことを正課教育科目で学修できるのが立教サービスラーニング（RSL）です。

RSLでは、大学というキャンパスでの学びと社会とのつながりをRSLセンターが提供する「フィールド」を活用することで往還させながら、学生個人の学びをより深めてもらいたいと考えています。

また社会の現場で活動することは、学生個人のなかにある「当たり前」を問い直すことでもあります。社会のなかにある「多様性」を認識し、自分はこれから「どんな場所で」、「どのように生きていくのか」、「どんな現実があるのか」等を問うことは、あなたの将来のテーマをみつけるきっかけになるかもしれません。

立教大学ならではの特色ある科目にぜひ、チャレンジしてみてください！

詳細はガイドを見てね！

「立教サービスラーニング（RSL）センター」と「ボランティアセンター」は、池袋・新座両キャンパスで協力連携し、学生の学びをサポートしています！

2024年度「RSL-ローカル（南魚沼）」

[立教大学陸前高田サテライト]

本学は東日本大震災の復興支援活動に取り組んできました。特に震災前から「林業体験」を通じて友好関係を深めていた岩手県陸前高田市を「重点支援地域」に指定し、同市をフィールドとした多様なプログラムを実施しています。2017年には岩手大学と協働で交流活動拠点「陸前高田グローバルキャンパス（サテライト）」を開設し、2025年3月までの8年間、市民の皆さんはもちろん、学生や研究者といった大学関係者、企業や行政関係者など多くの人々が集う空間として活用してきました。

2025年度からは立教大学陸前高田サテライトとして新たに交流活動拠点を開設し、より一層相互の交流を図り、かつ深められる空間を目指しています。

また、多くの学生が同市を訪れることができるよう、一定の条件を満たした場合に交通費・宿泊費の一部を援助する制度も用意しています。

詳細はこちら
（RIKKYO PORTAL）

立教大学陸前高田サテライト
（交流活動拠点）

2025年度「陸前高田交流ツアー」

頼れる情報源はコチラ

ボランティアセンター webサイト

http://s.rikkyo.ac.jp/volunteer

ボランティア団体の皆様・一般の方向けの情報を掲載しています。

RIKKYO PORTAL ボランティアセンター ページ

https://portal.rikkyo.ac.jp/volunteer

立教生に活用していただきたい情報を掲載しています。

Eメールでのお問い合わせ

volunteer@rikkyo.ac.jp

ボランティア活動に関すること、相談の予約等を受け付けています。

ボランティア情報ファイル

ボランティアセンターでは、団体情報、活動内容の資料を提供します。

メールマガジン（月1回、月初に発行）

ボラセンからのお知らせやボランティア募集情報・イベント情報などを配信しています。

●メルマガ登録申し込みフォーム
https://forms.gle/FVFFB5wEH77y8qGs9

※立教Gmail（学生番号@rikkyo.ac.jp）にお送りします。
携帯電話、個人アドレスは登録できません。

ボランティアセンター掲示板

池袋キャンパスは5号館1階、新座キャンパスは7号館2階に常設掲示板があります。学内立て看板、学内掲示ポスター、立教時間などもご覧ください。

ボランティアナビ

ボランティア募集情報の閲覧サイト

センターに届くボランティア募集情報を、ネット上でも閲覧することができます。
V-Campus 利用者のみ閲覧可。ログインにV-Campus の ID とパスワードが必要です。

note

立教生のボランティア活動の「今」を知ることができる情報等を随時紹介しています。
ぜひご覧ください！
https://note.com/rikkyo_volunteer/

SNS 情報

X（旧Twitter）アカウント　@rikkyo_volucen
Instagram アカウント　rikkyo_vc

X（旧Twitter）　Instagram　YouTube

ボランティア保険について

ボランティア活動中に本人がケガをしたり、他人に損害を与えた場合に補償する保険です。近くの社会福祉協議会で加入できます（年間350円～、年度ごとに更新）。また国際ボランティアに参加する方は、長期・短期にかかわらず海外旅行保険に必ず加入しましょう。

立教大学 ボランティアセンター

ボランティア活動に関して何でも気軽に相談してください。
ボランティアに関する多彩な情報、活動・交流の機会やスペース、
そして専門的なスタッフによるサポート体制を用意し、
みなさんの想いをカタチにできるよう、共に取り組んでいきます。

池袋キャンパス

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3 -34-1
TEL 03-3985-4651　FAX 03-3985-4657
開室時間　月～金 9:00 ～ 17:00
※開室時間は、池袋・新座両キャンパス共に変更になる場合があります。

池袋・新座共通メールアドレス　volunteer@rikkyo.ac.jp

新座キャンパス

〒352-8558 埼玉県新座市北野1-2-26
TEL 048-471-6682　FAX 048-471-7312
開室時間　月～金 9:00 ～ 17:00

立教大学ボランティアセンター 2026 年度 ボランティアガイド

発　行：2026 年 4 月
発行者：立教大学ボランティアセンター
池袋キャンパス
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
TEL. 03-3985-4651　FAX. 03-3985-4657
新座キャンパス
〒352-8558 埼玉県新座市北野 1-2-26
TEL. 048-471-6682　FAX. 048-471-7312
email：volunteer@rikkyo.ac.jp　web：https://portal.rikkyo.ac.jp/volunteer
印　刷：株式会社太平社